



## 健康と温泉フォーラム第71回月例研究会

- 主催：特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム
- 共催：非営利団体地域活性学会 特定非営利活動法人日本スパ振興協会  
一般財団法人日本健康開発財団 併催 温泉療法医研修会
- 日時：2017年5月19日(金) 13:30~16:45 (受付13:00から)
- 会場：東京文化会館4階大会議室 (JR上野駅公園口前)
- テーマ 「日本近代温泉文学の誕生 夏目漱石から川端康成へ」
- 講師： 岡村民夫 (法政大学教授)



1961年、横浜に生まれ。立教大学文学研究科単位取得退学。法政大学国際文化学部教授(表象文化論、場所論)。場所という角度から近現代の文学・芸術・思想を捉えなおす。日本温泉文化研究会会員、宮沢賢治研究会会員、四季派学会理事。

《主な著書》『旅するニーチェ リゾートの哲学』(白水社)、『イーハトーブ温泉学』(みすず書房)、『温泉をよむ』(講談社学術新書、共著)、『柳田国男のスイス渡欧体験と一国民俗学』ほか。

### はじめに 温泉小説とは何か

「金色夜叉」〔尾崎紅葉、一八九七—一九〇二年〕や「<sup>ほととぎす</sup>不如帰」〔徳富蘆花、一八九八—一八九九年〕は余りに有名であるけれども、熱海や伊香保を書いた小説とは決して云へない。書いてあるのは、熱海や伊香保の景色だけである。舞台上に借りたに過ぎない。従つて、土肥の海岸の別れであつても、塩原の山の蕨狩りであつても小説には差支へないわけである。お宮や浪子は熱海や伊香保の土地の人がどんな生活をしてゐようと、知つたことではない。眼中にあるのは、貫一と武男に過ぎない。彼らは旅行者である。温泉場の人間ではない。(川端康成「温泉雑記」一九三四〔昭和九〕年)

— 一九〇六(明治三九年)年、夏目漱石(一八六七—一九一六年)の温泉小説三部作

「(10) 温泉場」(断片三二A〔手帳④3—7〕、明治三八、九年、『漱石全集』第一九卷、岩波書店、一九九五年、一九三頁)

『坊っちゃん』 道後温泉本館→住田温泉

大抵は十三四人漬つてゐるがたまには誰も居ない事がある。深さは立つて乳の辺までであるから、運動の為に、湯の中を泳ぐのは中々愉快だ。おれは人の居ないのを見済しては十五畳の湯壺を泳ぎ巡つて喜こんで居た。所がある日三階から威勢よく下りて今日も泳げるかなとぎくろ口を覗いて見ると、大きな札へ黒々と湯の中で泳ぐべからずとかいて貼りつけてある。

『草枕』 湯ノ浦温泉(現小天温泉)秋錦園前田温泉(前田案山子別邸)→那古井温泉志保田旅館

三畳へ着物を脱いで、段々を、四つ下りると、八畳程な風呂場へ出る。石に不自由せぬ国と見えて、下は御影で敷き詰めた、真中を四尺ばかりの深さに堀り抜いて、豆腐屋程な湯槽を据ゑる。槽とは云ふものゝ矢張り石で畳んである。鉱泉と名のつく以上は、色々な成分を含んで居るのだらうが、色が純透明だから、入り心地がよい。折々は口にさへ含んで見るが別段味も臭もない。病氣にも利くさうだが、聞いて見ぬから、どんな病に利くのか知らぬ。固より別段の持病もないから、実

用上の価値はかつて頭のなかに浮んだ事がない。只 這入<sup>はい</sup>る度に考へ出すのは、白楽天の  
おんせんみずなめらかにしてぎょうしをそそぐ  
温泉水滑洗凝脂と云ふ句丈である。温泉と云ふ名を聞けば必ず此句にあらはれた様な愉快的気  
持になる。又此気持を出し得ぬ温泉は、温泉として全く価値がないと思つてゐる。此理想以外に温泉  
に就ての注文は丸でない。

輪郭は次第に白く浮きあがる。今一步を踏み出せば、折角の嫦娥が、あはれ、俗界に墮落する  
よと思う刹那に、緑の髪は、波を切る靈亀の尾の如く風を起こして、奔と靡いた。渦捲く煙り  
を劈<sup>つんざ</sup>いて、白い姿は階段を飛び上がる。ホゝゝと鋭どく笑ふ女の声が、廊下に響いて、静かなる  
風呂場を次第に向へ遠退く。余はがぶりと湯を呑んだ儘槽の中に突立つ。驚いた波が、胸へあたる。  
縁を越す湯泉の音がさあさあと鳴る。

『二百十日』 阿蘇<sup>あそ</sup>内牧<sup>うちのみき</sup>温泉養神館（現山王閣）

[.....] 圭さんは、両足を湯壺の中にうんと踏ん張って、ぎうと手拭をしごいたと思つたら、両端  
を握った儘、ぴしやりと音を立て、斜<sup>はす</sup>に膏切<sup>あぶら</sup>った背中へ宛てがった。やがて二の腕へ力瘤が出来上  
がると、水を含んだ手を、岡の様に肉づいた背中をぎちぎち磨り始める。

手拭の運動につれて、圭さんの太い眉がくしやりと寄って来る。鼻の穴が三角形に膨張して、小  
鼻が勃として左右に展開する。口は腹を切る時のように堅く喰締<sup>くいしば</sup>つた儘、両耳の方迄割けてく。  
「まるで仁王の様だね。仁王の行水だ。そんな猛烈な顔がよく出来るね。こりや不思議だ。さう眼  
をぐりぐりさせなくつても、背中は洗へさうなものだね」と冷やかす。圭さんは何も云わずに一  
生懸命にぐいぐい擦る。擦つては時々、手拭を温泉に漬けて、充分水を含ませる。含ませるたんび  
に、碌さんの顔へ、汗と膏と垢と温泉の交つたものが十五六滴ずつ飛んで来る。

「こいつは降参だ。ちよつと失敬して、流しの方へ出るよ」と碌さんは湯槽を飛び出した。

二 川端康成（一八九九—一九七二）『伊豆の踊子』一九二七（昭和二）年 湯ヶ島温泉湯本館、湯  
ヶ野温泉福田家

「向うのお湯にあいつらが来ています。——ほれ、こちらを見つけたと見えて笑っていやがる。」

彼に指ざされて、私は川向こうの共同湯の方を見た。湯気の中に七、八人の裸体がぼんやり浮ん  
でいた。

仄暗い湯殿の奥から、突然裸の女が走り出して来たかと思うと、脱衣場の突鼻に川岸へ飛び下  
りそうな恰好で立ち、両手を一ぱいに伸して何か叫んでいる。手拭もない真裸だ。それが踊子だっ  
た。若桐のように足のよく伸びた白い裸身を眺めて、私は心に清水を感じ、ほうっと深い息を吐い  
てから、ことこと笑った。子供なんだ。私たちを見つけた喜びで裸のまま日の光の中に飛び出  
し、爪先きで背一ぱいに伸びをするほどに子供なんだ。私はほがらかな笑がいつまでもとまらな  
かった。

『草枕』との類似：旅の青年が山の峠で雨に降られ、茶屋に避難し、茶屋の老婆からヒロインについ  
ての噂を聞く。峠を降りたところの水辺にある南国的な温泉で、ヒロインの裸体を見る。

## むすび 夏目漱石から川端康成へ

「温泉小説」を、単に温泉を舞台にした小説としてではなく、温泉を作品構造のうちに有機的に組み  
込んだ小説と定義するならば、その創設者は夏目漱石であり、一九〇六（明治三九）年こそ日本近代  
温泉小説誕生の年である。そして漱石によって礎が築かれた温泉小説の正統な後継者は、川端康成で  
あると考えられる。